

第65回 小中高校生の吃音のつどい(演劇レッスン)

11月23日(日)、江東区立南陽小学校ことばの教室にて開催。小学生14名、中学生6名、高校生7名、兄弟姉妹6名、ご両親27名、スタッフ48名の計108名が参加。午前は「演劇レッスン」。北原白秋「お祭」、金子みすず、谷川俊太郎、くどうなおこ、山村暮鳥、マークトウェインの詩を、各自、自由に演出してショート演劇として形作りました。皆様如何でしたでしょうか。

私は率直に楽しかったです。当初、秋のつどいが「演劇」であると聞いた時、嫌な気分一杯でしたが、練習していく中で徐々に恥ずかしさを無くし、本番ではありのままの自分を出すことが出来たと思うので、結果やって良かったと感じました。歌や声出しについては、より参加者の皆様が打ち解けながら楽しめていたのかなと思いました。長田みどりさん、ありがとうございます。スタッフミーティングの時も、からだのゆらしや声出しをやりましたが、とても楽しかったので、時間あれば当日も、もっと長い時間やってみたかったです。

○小学生に演劇を教える 子供達は最初「どうやったらいいの?」と迷った表情をしていたが、ある程度ベースを教え実際に演劇をやってみると、それぞれ自分なりに工夫した演劇をしていて、演劇を楽しめているように思えました。

○小学生グループ話し合い とても楽しかった。ゲームから始まり、他己紹介ゲームなど、小学生みんなが積極的に楽しんでいました。小俣美佳子さん(世田谷区砧小)進行の一つ目のゲームで緊張感がほぐれ、次の他己紹介ゲームでは、1名の出題者がヒントをいくつか挙げて、誰のことを紹介しているかみんな当てクイズをやりました。手を挙げたり、出題者になったり、積極的に前に出る部分がとても良かった。

スタッフ全体で丸となって、とても楽しい演劇レッスンが出来た。多くの子供達の良いところを引き出すことが出来たと思います。充実していました。皆様、ありがとうございました。(リーダー:吉良日希、斎藤新、松崎圭祐)

Y.M 君(小2)

前はどまののをいやだなんて思っていたけど、クラスのTくんが「どもっちゃうのなんてさしょうがないんだから、気にしないでしゃべっていいんだよ」って言ってくれた。だからオレは新しい一歩をふみ出せた。そこからみんなにも「オレどもっちゃうから」って言えるようになった。

思うんだ、どまののってへんじゃないし、しょうがない。オレもみんなと同じ人間、いっしょじゃん、なのに、どもりが原因で仲間外れとかはいけないと思う。どもって、しゃべる人に伝えたいことがあるんだ。「あ、あ、ってへんだね」って言われて泣いてると思うんだ。ただ一番に思ってたほしいことは自信をもってほしい。

オレは母ちゃんとかじゃない、Tくんと言われて一歩をふみ出せた。世の中にはオレを支えてくれる人が沢山いて嬉しい。中高校生のつどいを考えた人はすごいと思ってる。ありがたいと思ってる。こ

の場所は楽しくどもっていいんだって思える場所だからホッとする安心できる場所なんだ。だからオレは大きくなったら、つどいのスタッフになるよ。

Y君のお母さん

今回は2回目の参加となりました。それなのに懐かしい雰囲気を感じるのは何故なのでしょう。温かい空気感、子供達の笑顔がそうさせているのだと私は感じております。

詩の朗読、演劇レッスン、学年別話し合いと3つの枠がありました。

演劇レッスンの発表時、2年生の我が子は、とてもいきいきとしていました。元々活発で明るい彼は笑いまでとっていたことに素直にすごいな!この度胸!と思いました。これは吉良さん筆頭のリードがあったからこそだと思っております。

学年別話し合いの場では、他の保護者の方の想い、意見、感情、様々な事を考えさせられるとても有意義な時間を過ごす事ができました。吃音

の事で、親の立場である私達は沢山の事を考え勉強し、今この時があります。それは皆それぞれ違う道を通りながらもこの場に来ました。そこでまた沢山の事を考えさせられます。

私は後ろを向くのは嫌です。子供と共に悩みながらも前を向いていきたいです。その為には、やっぱり沢山話をする事だと思っております。月齢により、それも難しくなってくる時が来るかもしれません。でも今はその土台作りとも言える時期なのかもしれません。私達親が先走り過ぎず、力強く温かく厳しく見守っていく気持ちに変わりありません。

このような場を作っていただきました皆様には感謝の気持ちで一杯です。息子も大学生になったらスタッフになりたいそうですよ(^) 楽しみに待っていてくださいね。

(日記より)

今の息子は吃音と真正面から向き合っていると見える。それはとても喜ばしい事であり、また課題が生まれた瞬間でもあった。吃音と向き合う事のできた8歳の息子。本当に頭がいいと思うし、回転も早い。尚且つよく考え見ている。今の月齢では「どもってもしようがない」で、いいと思っている。これから先、高学年、中学生になっていった時の事をすごく考える。

決して分かってくれる人ばかりじゃないという事。その事と向き合っていかなければならないという事。「どもったってしょうがない」は、小さい時しか公言できないという事。どもりながらしゃべる息子の話を聞いてくれている相手の気持ちも考えなければならぬという事。

これらの事を、いつどのタイミングで伝えていけばいいのか悩んでいる。理解できる自頭を持っている息子だからこそ、伝え、話す時期を考える。早過ぎても遅過ぎても、自分の思っている事を素直に言える子ではなくなってしまうと思う。だからこそ思う。普段から吃音の事を会話の中に入れていきたい。聞き取りにくい時は、こちら素直にちょっと聞きにくかったな、とかどもっちゃったのわかった?とか、ごく当たり前に聞いていきたいと思う。今現時点で私はそれを実行している。

K.Kさん(小4 S君のお母さん)

次男は4歳くらいから言葉に詰まるようになりました。

我が家は23歳になった長男に、重度の障害があるので、そのことからかわれないように、次男の友達をどんどん家に呼んで、一緒に食事をしたり泊まってもらったり、プールに連れて行ったりしました。初めて我が家に来るお友達には、必ず、「お母さんのお腹にいる時に、頭の中に傷ができて…」と兄の障害に関する説明をして来しました。

長男は、自分では言葉を発しない子ですから、次男が吃音でも話せることだけで十分だと、あまり次男の辛さに思いを馳せてこなかったかもしれません。これまでは、友達にからかわれないように、学校の先生やお友達お母さんに説明してきましたが、知的障害の重い長男は持たないで済んできた、自分を見るもう一人の自分が、高学年になった次男を苦しめ始めているようです。

そのことに気付いてから、吃音の仲間に出会わせたいと思って、これまで嫌がっていたことばの教室に通うことを粘り強く説得して、来月から通わせることにしました。

先日、その見学に行ってきた、今日の集いの案内をもらってきたので、ぜひ参加させたいと思いました。

ところが、行きたくないと、何日も何日もごねるのです。

友達と遊びたいというのが理由ですが、よくよく聞いてみると、見学に行ったことばの教室で、自分が一番重症だったと印象があって、また、この集いでもそうなのかもしれないから嫌だということです。

私は、「人と比べなくていい。誰かと比べれば、誰かが一番良くて、誰かが一番びりで、そればかり考えるから。一生懸命話せば、素敵だと思うよ」と話しましたが、しょせん私は、話すのが苦手ではない、吃音のない大人で、本当の、本人の辛さは分かってあげられません。母親として、分かってあげたいけれど、理屈でいつも追い詰めるだけです。

それを次男に話しました。

「中高生や大人になった時に、同じ吃音を持つ仲間がいたことを思い出して欲しいから、今日は、

行ってみよう。次からは、行きたくなった時に行けばいいから」と。

しぶしぶ、午前中の見学だけという約束で付いて来ました。始まる前は、会場の後ろの壁の花？になるつもりで、最後列にいました。ところが、大学生の素敵な3人のお兄さんの自分と向き合っている姿を見て、私と同じように感動したのか、

「子供達、前に出ておいで〜！」の声に、自分からずっと、母親と離れて前に出て行きました。

その背中、なんと誇らしかったこと！涙でかすみそうでした。

そのまま、見学者のはずが、ちゃんとあんなに嫌がっていた演劇までやり遂げてしまい、私は、次男が誇らしくて、帰りに一杯誉めました。

なんで、出て行けたの？と聞くと、「行くしかないっしょ！」とさっぱりと、吹っ切った顔で答えてくれて、一日でとても成長したようでした。

会報や本で読むよりも、自分の目の前で、将来の自分を映す青年達に出会えたことが、本当に貴重な体験だったようです。

吃音を隠さず、大勢の前で話し、子供達や仲間のために大変な準備をしてきた皆さんの姿を見て、次男が皆さんのような素敵な青年になったらすごいことだな、と思いました。

いつもは、10時には遅くとも寝る次男が、なかなか眠れないと起きてきて、このパソコンをのぞき込んでいます。

「今日は記念日だから、起きていてもいいですよ。」

「何の記念日？」

「分かっているでしょ！」

体ゆらしの体操をしながら寝ようね！大好きなSくん！

今頃は、サイゼリアでの打ち上げも終えて、皆様それぞれのお家に帰る途中でしょうか？息子が10年後、今日のリーダーさん達のような素敵な青年になれたらいいなと思います。困難に向かって、自分をごまかさずに仲間と手を携えて、子供達に勇気を与えてくださっていることに、感動しました。素晴らしい勇気に、敬意を表します。ありがとうございました。

加納 典子(杉並第十小 ことばの教室)

昨年6月の音楽の集い以来、久し振りに参加させていただきました。音楽もそうですが、今回の「演劇」も、大勢の人の前で何かをする…という点で、吃音の有る無しに関わらず、ハードルの高い取り組みだと思います。冒頭に、「(演劇は)…人気がありません…」というお話がありましたが、それにも関わらず、小学生から大学生までこれだけたくさんの方が集まるのは、それだけですばらしいと思いました。

1〜2年生の時にことばの教室(中野区立桃園第3小)で担当していた三輪矩明君が、今回は「かまきり」の詩(くどうなおこ)を朗読しました。大胆な振りもつけて、大きな声で堂々と演じていました。「三輪君なら、やっつのける！」と思ってはいましたが、予想以上に生き生きと演じていました。会場からも大きな拍手をもらい、また一つ自信がついたことでしょう。(とても緊張したでしょうね。お疲れ様)

「かまきり」については、小学校2年生の時、学校の学習発表会の演目だったそうです。私も見たはずなのにすっかり忘れていました。三輪君は、その時の事をよく覚えていて、「カマキリのかまが取れてしまった」とか、いろいろなエピソードを思い出して話してくれました。それと共に、小学生の頃の自分を振り返り、じっと落ち着いていられなかった事、教室に入れなくなってしまった事やその時の気持ちなど、分析していました。

低学年の頃は吃音も重く、言いたい事があるのにどうしても言葉が出て来ず、とうとうホワイトボードまで駆け寄って、ダーっと文字で書いていた事を思い出します。その三輪君が、つどいに通い続け、こんなに立派な大人に成長したなんて、本当に心から嬉しく思いますし、つどいの仲間の力や支えが大きかったのだと感謝の気持ちで一杯です。これからも、無理なく長く活動を続け、後に続く仲間に三輪パワーを分けてあげて欲しいなと思います。

M.Wさん(中 3)

昨日はありがとうございました。からだのゆらしをやった時、気付くことができました。それは、力を抜くことの大変さです。私は、難発で声が止まると、力が入ってしまうので、すぐに、抜けるように練習をしたいと思いました。

話し合いでは、多くの事を学べた気がしました。KJ法では、皆の考えは、全く違うんだと思いました。全部違うと言う訳では、ありません。

KJ法をやっていく上で、今回のテーマ『**吃音が治るって？**』皆の答えは治ってほしい。治らなくていい。などでした。

私の答えは、

『**治る。治らない。の問題じゃない。吃る自分が私だから**』『**治って欲しいけど治って欲しくない。私は、治る自分が想像できない**』です。

これは、つどいに行ったからこそこの答えだと思いました。私にとってつどいは、アットホームでとても安心できる空間です。そして、安心してどまれる場所です。

私は、たまに、なんでもののだろうと怖くなる時があります。でも、この考えも変わってきました。受験の面接も怖いけど、つどいの人などに相談し、安心して受けたいです。佐藤さんをはじめ、スタッフの皆さん、このような会を開いてくださりありがとうございます。これからもよろしくお願いします！

嶋田 聖子^{しょうこ}(中学生Gスタッフ、

国立障害者リハビリテーションセンター学院 言語聴覚学科1年)

今回は当日のみ、ほとんど見学のような形で参加させていただきましたが、午前も午後も、驚きと発見が一杯でした。

午前中の**演劇・詩の朗読**では、**みんなにこんなにも自分を表現したい気持ちがあった、ということ**に正直、驚いてしまいました。

演劇的なものをみんなですると、恥ずかしさや「やらされている感じ」が全面に出てきてしまうことがあります。今回は、恥ずかしいだけではありませんでした。照れていてもちょっと誇らしげだったり、

終わった後に満足そうな表情が見られたり、やってみて良かったね！と言いたくなるような場面がたくさん見られました。

何事においても、自分を表現することは、傷つくリスクをとることだと思います。今回素敵な発表会が実現したのは、つどいでは安心して、堂々と自分を表現していいよ、ということがしっかり伝わっていたからこそではないでしょうか。

スタッフの方々のデモがあったことや、リーダーの方々が良い雰囲気を作ってくれたことが大きかったと思います。子供達にはロールモデルとなる先輩がたくさんいて、いいですね。

午後の話し合いでは、中学生グループに入れたいただきました。ここでは、つどいのメンバーの中でもこんなにも意見が違うのか、ということに驚いてしまいました。

吃音について指摘された時の対処法としては、「逃げる」、「さりげなく話をそらす」、「説明する」、「知らない方が悪い」といったあらゆる意見が出ましたし、自分自身の吃音のとらえ方も想像以上にばらばらでした。

普段はなかなか話す機会のないことだけれどもいつも真剣に考えている、ということは共通しているようでした。

時間が経つとまた考え方も変わるのだろうな、今の自分の考えをとっておくことができたらいつか自分を見つめ直したくなった時に、いい資料になるかもしれないな、などと考えながら聴きました。

金澤 誠(大1、荒川区立第三峽田小卒)

演劇ではまず手本としてスタッフによる発表があったのですが、吃音があっても自分を表現することは楽しいことであり、ぜひ一緒にやろう！という思いが感じられてとてもいい発表でした。その後に参加者による発表があったのですが、小さい子供達が吃りながらも一生懸命楽しそうに発表する姿がとても印象的でした。彼等の発表する姿を見ていると吃音だからと言って自分を表現しようとしなはいはいけない事なのだと改めて思いました。

午後、高校生グループの話し合いに参加しました。ここでは**どもりカルタ(JSP 制作)**をしたり、ス

スタッフや参加者達が互いに悩みなどを相談したりしました。どもりカルタはカルタという遊びを通じて吃音と向き合う為の考え方を伝えられるので単純ながらもとても工夫されていて素晴らしいと思いました。

「隠したり 逃げたりすると 損をする」

書かれている事は単純ですが、吃音者にとっては最も重要な事の一つだと思います。私も以前は吃音で笑われるのが怖くて他人との会話を避けたり、みんなの前で発表などをしないようにしていました。要は自分を表現しようとしなかったのです。今から考えるととてももったいない事をしてしまったなと思っています。なぜなら人と話したりみんなの前で発表する事はとても楽しい事ですし、生きていく上での大切な経験でもあります。また、避けようとしたところで避けられるものでも無いのです。むしろ避ければ避けるほどこれらの事が苦手になっていき、不幸の連鎖を招いてしまいます。なので吃音を隠したりせず、ありのままの自分を表現していくことはとても重要なことだと思います。

「大人になった 吃る人

いろんな仕事についている」

私は以前吃音のせいで面接が上手く行かずに就職も困難で、その上たとえ就職できても仕事をしていく上でとても苦勞するだろうと思い、とても不安に思い、なんとか会話せずにできる仕事は無いかと考えていました。しかしこの、吃音者でもいろんな仕事に就いていると言う言葉を知ってからは不安が少し和らいで希望を持てるようになりました。また「英国王のスピーチ」で有名なジョージ 6 世やあまり知られて無いですがあのマリリン・モンローも吃音者でした。これらの事を聞いて私は吃音で自分の夢を諦めるのはとても愚かな事だ思うようになりました。なんせ吃音者なのに一世を風靡した大女優や国民を導き、第二次大戦後を戦い抜いた国王もいるぐらいなんですから。

「選ばれて 吃りになった その意味は？」

吃音は神様に選ばれたと言う札は一見するとおかしい札です。嫌な事であるはずの吃音に「選ばれた」と言う言葉を使うのはどうもふさわしくないように思われるからです。でも私の考え方は違います。この札には吃音であるという事を嫌な事であると決

め付けずに前向きに生きていこうと言う意味が込められていると私は思います。これは別に吃音自体を肯定している訳ではありません。実際吃音はとても辛い事ですし様々な弊害が付きます。しかし吃音である事は他人とは色々な意味で違う人生を歩めると言う事でもあります。吃音の辛さを乗り越える事で強くなれますし、吃音との付き合い方を考える事によって自分自身と向き合えて自分をもっとよく知る事もできます。そして吃音者である自分を受け入れてくれる人々の温かさに触れる事もできます。これらの事は人生にとってとても大切な事だと思います。この様な特別な体験ができるどもる者はある意味「選ばれた」者なのかもしれないと思います。

長田 みどり(高校生 G スタッフ、

都立南葛飾高校 演劇講師)

スタッフの皆さん、お疲れ様でした。そしてありがとうございます。今回も皆さんや参加者の方々から多くのことを学ばせて頂きました。

今回は小学生のパワーが初めから全開であったことには驚きました。司会のお兄さんがどもと、去年はなかなか輪に入らなかった子がずっと出てきて代わりに言ったり、心配そうに見守っている。多分それは、スタッフの皆さんが子供達との信頼関係をしっかり作っているからだだと思います。とても温かい気持ちになりました。

ゆらしは人数が多くて十分に集中し切れていなかったけれど、寝転んで、呼吸一発声をやっていく内に声が部屋一杯に広がって見事でした。また、子供だけでころがりながら声を出すことは難しかったようですが、去年よりからだを動かすことに抵抗が無く、初めからのびのびと動いている子もいました。

それは歌の時にも現れていて、私がホワイトボードの前に立っていると、一人が指揮の真似をしたので、「やってみる？」と声をかけると、「いい」と言って逃げたが、本当はやりたかったのだと思う。どもっても大丈夫という環境を作ってあげれば、子供本来の好奇心や積極性がどんどん出て来るのだと

思うと、おとなの責任を感じました。そして、今回はパワーの発露は充分でしたが、それがまだ散乱して充分には集中し切れなかった。私のやり方にも問題があったかもしれません。次回はもっと自分のやることに集中できるようなレッスンにしたいと思います。

「お祭り」も各グループでおもしろいアイデアが出て、毎年やってみてもいいかなと思います。スタッフのデモ、ならびに参加者の練習や発表は時間的に駆け足でしたが、「かえる」などは、なんと小学生の男子二人はアドリブまで入れていましたね。

いずれにしても、スタッフの方々の姿から、子供達は多くのことを受け取っています。皆さんの生きる姿勢や志を子供達が受け継いで成長していくこと、そしてスタッフの皆さんも社会に出てからもぜひ会とつながって、この会自体をさらに成長させることを願っています。

あらた 斎藤 新（高校生 G スタッフ）

開会式の時に私は司会をしておりました。その際、長い時間ことばが出て来ない場面がありました。その時に数名の小学生の子供達が私の下に駆け付けてきて、一緒に原稿を読んでくれるという場面がありました。正直、その時の自分のことばが出て来ないという事実が苛立ちを感じました。しかし、それと同時に小学生の子供達の優しさに触れることができました。こんなにも優しい空間は他にはありません。正々堂々と、どもることができ、かつここまで温かい空間はこのつどいの他にあるでしょうか。おそらく無いと思います。他の吃音の自助グループに参加すれば、正々堂々とどもことはできるかもしれませんが、このつどいほど、人の温かさは無いと思います。このつどいを大切にしていきたいと心より感じる瞬間でした。

後記

◆どもっていいは、小学生の時だけでなく、中高校生、そして、社会人になっても変わりません

どもっていい。普通にどもって、普通に生きていて良い。それをダメ…だと一番言うのは、親あるい

はその影響を受けやすい本人。聞いている周りのことも考えなさい…とのご心配は、御無用。仲間は、共に生活する中で、どもる人の良さを知っていく。どもることと共に伝わってくる話の中身にこそ、耳を傾けてくれるようになる。そんな中、真の友も見つかるでしょう。またはじめ、つい笑っちゃった子も、変わってくることも有る。

つどいの一番の強み・魅力は、普通にどもって普通に生きているありのままのスタッフの姿を見ていただけるということ。Let it go! この看板は永久に降ろすことはありません。

◆家族でどもることについて、会話することはとてもいいこと

もう一度ゆっくり話してみても…というのは、してはダメなこと。が、どもって聞き取れなかったら、何？と聞きかえせばいい。そして、どもることの辛さなど、話し合うことも自然なこと。タブーのように避けていると、逆に、吃音に向き合う・考えることそのものが悪い、弱いことと捉えてしまう。

♥スタッフあいさつ文を、小学生が代読

ああ、俺って…ダメな男だ…ではなく、純粹なHELP精神での子供達の働き。子供に助けてもらうことは、情けないことである…というのは、論理療法で言うところの、イラショナルビリーフ（非論理的な融通の利かない考え方）。声がどうしても出ない時もある。そんな時は、参加者の子供達に助けてもらって良いという…やわらかい考え方で行こう。

◆発表の場の意味 皆さんが見てくださっている場で発表する・精一杯頑張っている自分を見ていただく…ことで、新たな自分を発見できる。一人だけで練習するのではない。素敵なもの一杯生まれる発表の場。温かさ優しさあふれる場。

（代表 佐藤 隆治）